

これならわかる  経済の仕組み 第6回2013年4月4日  
全2頁

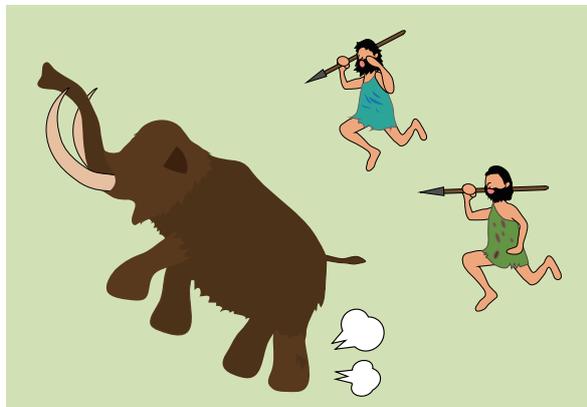
# 生産ということ

常務執行役員  
岡野 進

社会全体で考えたときの富とは何でしょう？それは、直接生活に役に立つモノやそれをつくるのに使う機械や設備などということになります。人間にとって役に立つということだと、まずは衣食住でしょう。人間も特に食べ物がなくては生きていけない存在ですし、基本的な住居や衣服は生活必需品の中の必需品といえるかもしれません。ぜいたく品と呼ばれるものも人間にとって好まれ需要される限り富の一部をなすでしょう。今日はこれらの生産ということについて考えてみましょう。

原始時代には、人間は、大型動物をつかまえる『狩猟』や木の実などを集める『採集』で食料を得ていました。やがて、人間が農業や牧畜を行うようになると、それにとまって文明も発達してきました。古代文明がみんな大きな河川の流域で起こっているのは、農業の発達と密接な関係があるからだといわれています。

なぜ農業の発達が、文明の発展につながったのでしょうか？狩猟採集の時代は、人々はなんとか食べ物を手にいれるだけで精一杯だったのではないかと考えられます。たえず、動物の獲物や植物の食料を求めて一定の範囲内を移動しなければならなかったでしょう。一方、豊かな土地で農業生産が発達すると、農耕する人の食べる分よりも多くの食料が生産できるようになってきます。特に、乾燥保存できる期間が長い小麦や大麦、米などの穀物を栽培する農業が始まったことで、安定的な食糧確保につながり、時間の余裕を作り出しました。そして農作業以外の作業にも多くの時間を割いたり、働



かない人を養ったりできるようになります。食料に困らなくなると、人々は心と時間に余裕ができて、いい服を着て飾りをつけたり、いい家に住んだり、運動や音楽を楽しんだりしたいという気持ちになっていったのかもしれませんが。そうすると、様々な祭祀や文化的な活動がおこなわれるようになり、それらを専門的に行う人も出てきます。

---

生活に必要なものを作ることに時間を使えて、生活を豊かにすることもできました。家屋の建設や衣服や食器などの製造が行われるようになったと思われます。また、鍬や鋤などの農機具を作ったり、農業技術を開発したりして、生産性を高める活動にも時間を使えます。さらに社会が発達してくると河川に堤防を作ったりするような公共工事もできるようになり、生産が飛躍的に高まり安定するという効果が出ました。そうした中で、文字が生まれたり、測量や計算といった技術が発達してきてきたのでしょうか。こうして、人間生活の向上のためにモノを生産するという行為が発達してきました。

そうした生産を高める上で役立ったのが、「分業」でした。分業によって、人々はそれぞれの仕事に集中し、能率がよくなります。さらに、機械が生まれてくると、能率が高くなり、人間の作業も楽になります。機械をなるべく効率よく使うほうが時間をうまく使えるようになるから、分業の効果は大きくなったと考えられるのです。そうして機械を利用して大量に必要なモノが作られることで人間の生活の豊かさが支えられるようになりました。

機械が単なる道具を越えて役に立つものとなった理由は何でしょう？道具は人間が仕事をするときに、手の代わりのように使えて、作り方を人間が決めることができるものです。それに対して、機械は、人間がなんらかの力を加えると（たとえばボタンを押したりするなど）、あらかじめ決まった複数の作業を自動的に行ってくれるのです。自動的にモノが作れるということが生産性向上の要ですね。

一番初めにできた機械は、どういうものだったのでしょうか？おそらく、織物、つまり糸から布を織る機械だろうとされています。もちろんはじめは人が動かして、さらに手作業も加えないといけないものでした。18世紀のイギリスで、人力が必要だけど、工程は主に自動で動く織物の機械ができ、どんどん改良されていきました。これがいわゆる産業革命と呼ばれる機械による工業の発達の始まりです。蒸気機関が出現して人力も必要なくなりました。機械を使うことでそれまでとは比較にならない効率でモノを作ることができるようになり、それはあらゆる分野に広がっていきました。しかし、すべてが自動かということ完全にはそうならず、機械の操作や監視など人間の労働はまだ必要です。



一方、人々がもっと豊かになってくると、さらに質の高いものを求めて、機械で大量生産された規格品より、手作業で作られた工芸品のほうが、価値が高くなる、ということはありません。大量生産されれば、生産するための費用が小さくなり、価格は安くなります。人手によって作られる工芸品は、そうはならないからです。

(以上)